

ペルー

Peru

農産品の対日輸出拡大に向けて

ジェトロ リマ事務所 山本 万里奈

近年農産品の輸出が拡大している。地域によって異なる地勢や気候に恵まれるペルーでは、各地で同国特有の作物が栽培される。これら農産品を輸出すべく、政府は支援策を講じている。農産品の輸出拡大に向けた、同国の官民での取り組みを紹介する。

コーヒーからアスパラ、チリモヤまで

多様な顔を持つ国——太平洋に面した西側は沿岸部のコスタ、アンデス山脈が連なる東側は山岳部のシエラ、北部にはアマゾン川流域の熱帯地域セルバが広がる。地形は変化に富み、地域によって気候も異なるため、野菜や果物の栽培が各地で盛んだ。

輸出業協会（ADEX）の通関統計によると、2014年の農産品輸出総額は50億8,600万ドル、前年比約20.2%増となった。上位5品目は、コーヒー、ブドウ（生鮮）、アスパラガス（生鮮・冷蔵）、アボカド（生鮮・乾燥）、キヌアである。中でもアスパラガス（生鮮）は、前年比6.9%減となったものの輸出国としては世界第1位を保持。前年比45.4%と急増したブドウは世界第5位だ。

対日輸出はどうか。コーヒーに加え、近年ではアスパラガス、マンゴー、バナナといった野菜や果物の輸出が増加している。しかし、野菜の輸出は、主力のアスパラガスが12年を境に減少に転じたことから、14年には1,586万ドルと前年比21.2%減となった。他方、果物は年々増加し、14年は前年比5.9%増の約1,598万ドルと、野菜の輸出額を上回った。

近年注目されているのが、ペルー産の高機能食品だ。日本で目にする機会はまだまだ少ないが、紫トウモロコシ、キヌアなどの穀物、白カカオ、サチャ・インチャやチア、ルクマ、チリモヤといった果物は、老化の原因とされる体内の活性酸素を抑える抗酸化物質を豊富に含む食

品として注目を集める。これらのうち、日本が輸出先として第1位となっているのが、“インカナッツ”の異名を持つサチャ・インチャである。抗酸化作用があるとされるオメガ脂肪酸（オメガ3、6、9）を豊富に含み、オイルやスナックとして食される。サチャ・インチャ・オイルの対日輸出額は36万ドルと全体の20.1%を占め、日本市場での人気の高さがうかがえる。

アボカド輸出量は世界第2位

輸出農産品の上位に名を連ねるものの、いまだ対日輸出が実現していない産品が生鮮アボカドである（冷凍品の実績は米国に次ぐ世界第2位）。主な生産地は沿岸地域。ラ・リベルタ、リマ、イカの3州を中心に、北はピウラ州から南はタクナ州まで南北に産地が広がる。13年におけるアボカド収穫の面積を合計すると、2万5,750ヘクタールに上る。輸出量ではメキシコ（64万9,000トン）に次ぐ世界第2位を誇る。14年の輸出は前年比56.2%増の17万9,110トンへと増加した。輸出先は米国向けが約6万5,000トン、次いでオランダ、スペイン、英国と続き、これら3カ国向けが合計で10万3,500トンと、欧米諸国向けが中心だ（表）。カナダ、中南米向けも伸びているが、今後は中国、日本への新規輸出が期待されている。

南半球に位置するペルーでは3～9月が秋冬にあたり、この時期がアボカドの出荷時期となる。メキシコでは1年を通してアボカドの収穫が可能だが、農繁期は9～1月。同国で減収となる時期にペルー産アボカドを輸出すれば、輸出拡大のチャンスがある。価格面でも優位性がある。各国輸出平均価格（14年）を比較すると、米国産は1トン当たり3,024ドル、メキシコ産は2,172ドルであるのに対し、ペルー産は1,715ドルと安価だ。日本が輸入するアボカドの約9割はメ

キシコ産だが、植物検疫の課題をクリアすることができれば、ペルー産の対日輸出の可能性も見込めよう。

アボカド輸出の障害を克服

ペルー産のアボカドの品種は、輸出向けの Hass 種と国内向けが主流の Fuerte 種、Zutano 種、Edranol 種などがある。筆者は、ペルー産 Hass 種の対日輸出実現を目指す業界団体 ProHass にインタビューする機会を得た。同団体には Hass 種の生産者と輸出者の 8 割が所属し、生産・輸出の促進を行っている。アルトゥーロ・メディーナ事務局長によると、Hass 種は熟成時に皮の色が黒くなるのが外見上の特徴である。他品種は、食べ頃を迎えても皮は緑色のままだ。輸出をする上で最も重要な特徴はこの皮にあるという。Hass 種の皮は他品種に比べ堅く、輸送に適していることに加え、チチュウカイミバエも付着しない。

チチュウカイミバエは、日本でも有害動植物に指定される。ペルーから生鮮果物を輸出するには、同害虫の駆除が不可欠となる。ペルーでは現在、検疫上の対策を採りつつ、アボカド輸出先の多角化を目指している。この問題を克服し、輸出が顕著に伸び始めたのが米国向けだ。ペルー産アボカドの対米輸出は、07 年までは輸出実績が少なかったにもかかわらず 11 年以降増え続け、14 年には急増した。11 年までは低温または薫蒸処理によるチチュウカイミバエの駆除が必要だった。しかし、米国政府、ProHass およびペルー農業灌漑省傘下の動植物防疫機関である国家農業検疫庁 (SENASA) の 2 年間にわたる共同調査の結果、Hass 種にはチチュウカイミバエが付着しないと実証することができた。そのため、同品種のアボカドに限っては低温処理などの植物検疫対策が不要となった。前出のメディーナ事務局長は、低温・薫蒸処理を施さないた

め果実の劣化が進まず品質が落ちないことが 13 年までの輸出で認められ、ペルー産アボカドへの信頼が高まったことで 14 年の対米輸出が急増したのだと分析する。同年、米国向け輸出は数量ベースでオランダ向けを上回り、輸出先第 1 位となった (表)。

農産品輸出大国への道

輸出拡大に向け、政府も政策面で尽力する。ペルーでは労働者保護の観点から解雇、給与引き下げなどが困難で、農繁期に一時的に雇用を増やすことができない。「非伝統産品輸出促進法」では、非伝統産品分野における労働者の短期雇用を認めている。輸出促進の支援策として労働者の一時雇用を認めることで、農家は収穫期に必要な労働者を確保し、集中的に生産効率を上げることが可能となる。逆に農閑期には労務コストを削減することができる。ペルーではコーヒー以外の農産品は全て非伝統産品に分類されるため、多くの農家がこの支援策を活用することが可能だ。

近年は農業促進のための大型灌漑施設建設プロジェクトが推進されている点も注目される。アボカド生産地の沿岸部ランバイエケ州では、政府のコンセッション (10 年 6 月から 25 年間) により、オルモス灌漑施設の建設が 14 年 11 月に完了。ブラジルのオデブレイト・グループ傘下の H2 Olmos 社が事業実施主体者となる同灌漑施設には、総工費約 5 億 8,000 万ドルの投資がなされた。ペルー北部に位置するピウラ州とカハマルカ州の州境を流れるワンカバンバ川から、隣接するランバイエケ州のオルモス地域に農業用水を引くという本プロジェクトでは、途中、アンデス山脈の一部を縦断するため、ランバイエケ州まで 20 キロに及ぶ灌漑用トンネルが建設された。これにより、オルモス地域の 3 万 8,000 ヘクタールの土地が肥沃な土壤へと変わり、作物の生産率が低かった別の 5,500 ヘクタールの土地をも潤すこととなった。

政府の輸出支援やインフラ整備もあり、今後もペルー農産品の生産・輸出拡大には期待が持てそうだ。15 年 5 月現在、ペルー政府はアボカドの他にブドウ、柑橘類、チリモヤの対日輸出解禁を要請している。日本でペルー産農産品を日常的に目にする日も、そう遠くはないかもしれない。

JA

表 ペルー産アボカドの主要輸出先国 (2010~14年、数量ベース)

順位	国	2010年	11年	12年	13年	14年	伸び率
1	米国	434	9,094	15,896	21,747	65,167	199.7
2	オランダ	26,570	38,124	35,251	50,461	58,284	15.5
3	スペイン	20,224	20,708	21,356	28,844	34,817	20.7
4	英国	4,412	6,030	5,426	6,238	10,399	66.7
5	カナダ	1,266	2,483	1,801	2,608	4,164	59.6
	その他	6,615	5,104	3,868	4,794	6,280	31.0
	合計	59,521	81,543	83,598	114,691	179,110	56.2

注：伸び率は2014年の前年比
出所：輸出業協会 (ADEX)